

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

## 再会

「ゆうにも寂しい思いをさせてしまった」  
流し台の前で襷掛けしたクニの後ろ姿の肩のあたりが僅かに震えた。

彌兵衛は火鉢で手を焙りながら、今から伝えようとする言葉を胸の奥で反芻していた。

「言い出せない。やっぱり、言えない。このことを伝えたら、クニはどうなってしまうのだろう。今のクニには、言ってはいけないのだ。」

彌兵衛は自分自身の心と闘っていた。

そんな時、突然、クニが驚きの声を発した。

「旦那さま、仏間でなにやら物音が聞こえます」  
「声もかけずに家に入って来るのはいずれ泥棒であろう。間抜けな泥棒であるのお。周藤家の家には盗む物など何も残ってはおらんわ」

彌兵衛は、そう言いながら、ゆっくりと立ち上がった。

「正月早々、こんな家に入ってきた気の毒な侵入者に、欲しい物が有ったら、なんでもくれてやろう。」

彌兵衛は心の中で、こんなことを考えていた。彌兵衛の後には箒を構えたクニが続いた。

彌兵衛が襲われたら、クニが箒で応戦するつもりだった。

仏間に近づくにつれ、二人は足音を忍ばせて、注意深く部屋の様子を窺った。漏れ聞こえる読経の声は、彌兵衛とクニにとって、忘れることの出来ない声であった。



画 高田勲

クニが「アッー」と、小さな声を出し、手に持っていた箒を投げ棄てると、慌てて襖に手をかけた。

「勘六！」

サトとゆうの仏前で経を上げていたのは周藤家の長男、勘六であった。

父の彌兵衛に反発して家を出て、行方知れずになってから、実に四年半ぶりの両親との再会だった。

勘六が周藤家に戻り、家の中にもやっと小さな春の訪れが感じられるようになった。

クニの悲しみも、日が経つに連れて少しずつではあるが薄らいで行くように見えた。

勘六と五郎太が、笑い声を上げながら、一緒に山の仕事に行くような光景も見られるようになり、村の人々は

「庄屋さんの家も、ようやく落ち着きなされたなあ」

と、噂した。

勘六は、家を出ていた四年半のことを口に出すことは無かったし、周りの者も強いてそれを聞き出そうとはしなかった。

五郎太は、彌兵衛に耳打ちし、

「勘六さまは、ときどき、どこかに通うておられます。いったい、どこへ通うておられるのでしょうか？」

と不安があったが、彌兵衛は五郎太を諫めた。